

方形区画（居館）の調査事例

－特に乙訓地域において－

岡崎研一

1. はじめに

平成21年度に京都第二外環状道路建設に伴う発掘調査で、長岡京市下海印寺西条に所在する下海印寺遺跡において、平安時代末の推定50m四方を堀によって区画された施設を確認することができた。出土遺物から、11世紀末から12世紀初頭までの短期間に機能しており、内部施設などから在地領主層の屋敷地であったと想定した^(注1)。類例としては、久御山町佐山遺跡がある。ここで検出した方形居館については、全国的に見て当該期のものとしては最大級であるとする。数多くの調査が実施されてきているが、このほかに類例は存在しないのであろうか。

中世居館や方形居館については、多くの調査事例を検証し、東日本や西日本における傾向や、このような方形に区画されたものがすべて在地領主層の屋敷地になるのかなど様々な角度から論じられてきている。本稿では、居館について論じるのではなく、乙訓地域あるいは周辺地域での調査事例の中に、堀などによって方形に区画された内側に居館は存在しないのか、その類例を提示することを目的とする。

2. 調査事例

類例を提示すると言っても、後世の削平を受けているため、どのような形で遺存したものを、方形区画とするかについては大きな問題である。仮に堀で区画されていたとすると、中心施設が消失するほど大きく削平を受けた場合に、周囲を巡る堀は残るのではなかろうか。その場合、中世の遺構でよく認められる耕作溝との違いはあるのだろうか。下海印寺遺跡で確認された堀の下位を検討し、幅が大きく、深さの浅い溝がL字やコ字状に屈曲するなら、その可能性は高いのではなかろうかと考えた。また、報告文に「居館」などを想定されたものについても掲載することとした。

①佐山遺跡^(注2) (第1図 ①-A、①-B)

①-Aは、久世郡の復原条里地割りに関連する遺構群で、11世紀後半である。①-Bは、その後に築かれた方形区画である。溝S D206・1145など、幅1m前後の溝が条里地割りに伴う溝として、縦横に掘られていた。その後、方形居館の濠として幅8m前後のS D5

が巡らされる。その規模は南北120mを測り、東西についてはほぼ同規模と考え、一坪が屋敷地になるとされる。濠は、11世紀後葉と13世紀前半の2回埋没した痕跡が認められ、その都度再掘削され、13世紀中葉まで機能していた。濠付近まで関連遺構が存在し、埋土中には土塁が崩壊し堆積した痕跡が認められないことから、区画内には土塁は存在しないとする。関連主要施設としては、掘立柱建物跡や井戸が見ついている。ここで見つかった方形区画は、全国的に見てももっとも時期の遡るもので、最大級の規模をもつ。遺跡は、宇治川・木津川の増水の被害を受けやすい土地に立地し、濠は周辺の耕作地を潤す灌漑用ため池を兼ねたもので、また水運にも利用されたとされる。

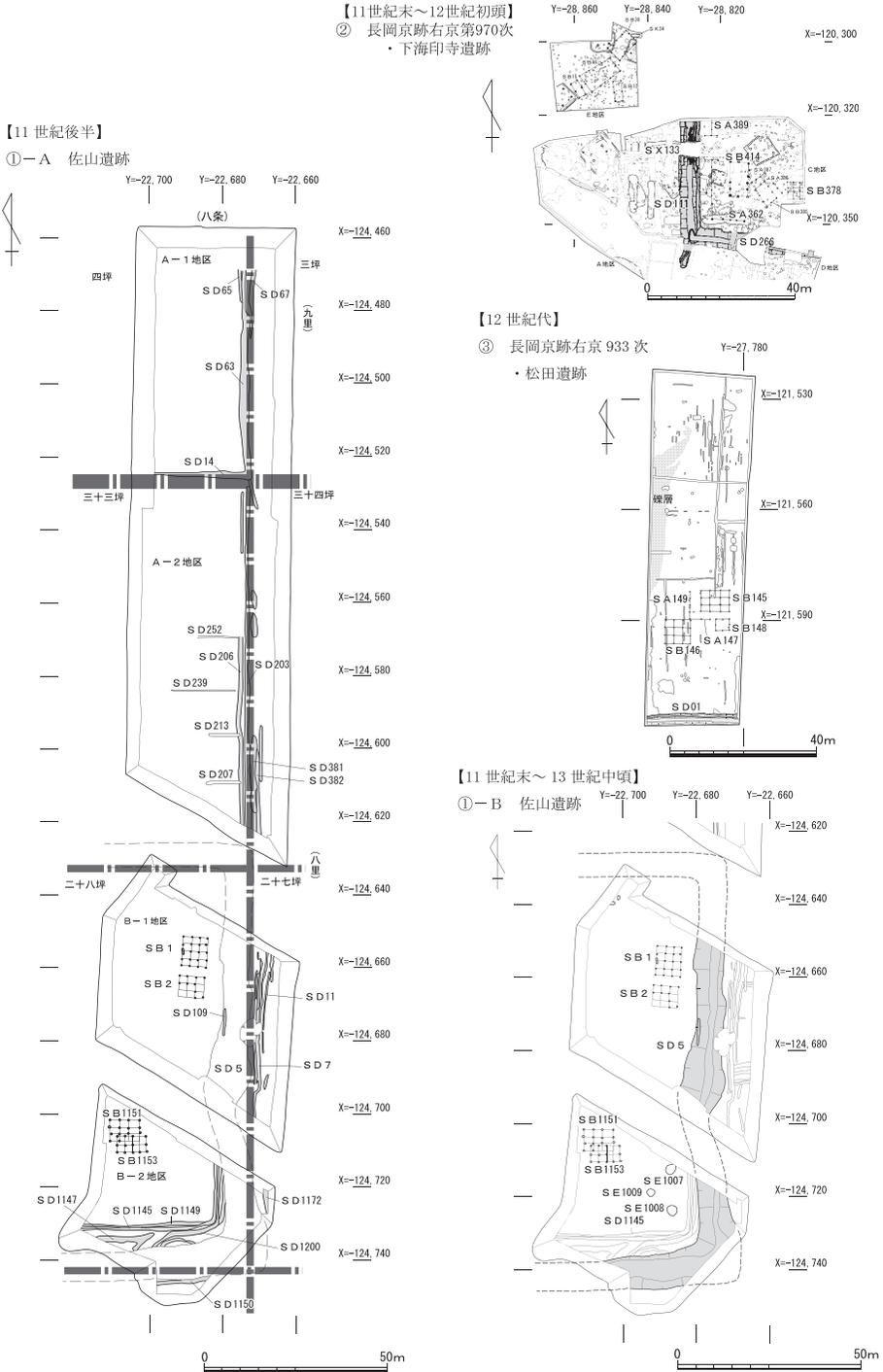
居館の主は、在地領主層であろう。石清水八幡宮の極楽寺領に「居屋狭山」の名が見え、この資料の年代が保元3年(1158)と居館の存続年代に含まれることから、「居屋狭山」がSD5に囲まれた居館を指す可能性もある。

②長岡京跡右京第970次・下海印寺遺跡^(注3)(第1図②)

冒頭で紹介した長岡京市下海印寺西条で検出した方形区画である。真南北方向の堀SD111と東西方向の堀SD266からなる。その規模は、幅5.0～6.0m、深さ1.8mを測る。堀屈曲部から北方25m付近には幅4.0mの土橋が築かれる。SD111を遮断する形で土橋が築かれており、下部には断面U字形の溝が設けられ、その中に頭大の石を埋め込む形で暗渠排



写真 下海印寺遺跡全景(上空から、左上が北)



第1図 関連遺構図(1)

水施設が設けられていた。この土橋が方形区画の西辺中央に築かれていたとすると、一辺50mを測る区画が復原できると想定した。内部施設としては、堀に沿う形で柵列が巡り、掘立柱建物跡2棟S B 414とS B 378を検出した。前者は、柱掘形が一辺0.7~0.8m、柱痕跡は径0.3mを測る大型の建物であった。堀の埋土から11世紀末から12世紀初頭頃の瓦器椀や土師皿などが出土した。方形区画内・外で検出した12世紀初頭以降の土器が出土する掘立柱建物群は、方形区画に比べて大きく西に振れる。これは12世紀初頭以降には堀が埋まって、新たにその主軸方向が西に振れる建物群が設けられたと考え、堀で区画された施設は、短期間で終焉をむかえたと考えた。佐山遺跡のように先行する条里地割りに関連する溝は検出できなかったが、乙訓条里五条七里三坪付近にあたる^(注4)。

この付近の荘園には、鞆岡荘や海印寺荘がある。鞆岡荘は、仁平元年(1151)撰関家領荘園として記述されている。海印寺荘は、東大寺の所領で永仁3年(1295)が初見であるが、永暦元年(1160)に海印寺の記載が認められている。また、仁寿元年(851)山城国乙訓郡木上山の地に十院からなる海印寺が建立され、平安時代末には藤原基房の祈禱所として撰関家に寄進されるなど、この付近は撰関家と関係の深い地であったことが窺える。

③長岡京跡右京第933次・松田遺跡^(注5)(第1図③)

大山崎中学校新校地の発掘調査で3つの遺構面を検出した中に、中世から近世の面で確認されている。中世の遺構は、溝1条(S D 01)と掘立柱建物跡3棟(S B 145・146・148)、柵列(S A 147・149)である。溝は、幅2.6m、深さ1.1mと大規模なもので、真東西方向である。掘立柱建物跡3棟は、この溝に平行する形で配され、2棟(S B 145・146)は3間×3間の総柱建物であった。当地は乙訓条里の三条八里にあたり、上記溝は条里制の坪境溝とされる。時期は、出土遺物から12世紀頃とされる。

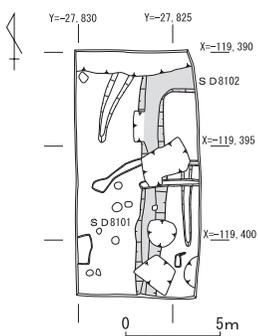
溝S D 01は、二十一坪と二十二坪境付近を通るが、佐山遺跡にみる条里関連溝と比べると大規模なものである。また規模からみても溝より堀の範疇に入るのではと思われる。S D 01が条里地割りに当てはまることを考えると、条里関連溝が先行して存在し、その一面を改変する際に溝の掘り直しが行われ、堀が築かれたと考える。このような施設を構える原因としては、在地領主層の屋敷地あるいはその関連施設と考えられる。掘立柱建物跡3棟は、内部施設の一面にあたるのか、付属施設にあたるかは不明である。

④長岡京跡右京第81次・開田城ノ内遺跡^(注6)(第2図④)

阪急長岡天神駅北方約150mからL字状に屈曲する溝(S D 8101・8102)が検出された。出土遺物から、12世紀末~13世紀初頭に機能していたとされる。溝S D 8101は、南北方向に掘削され、幅1.0~1.3m、深さ0.8m、確認長11.8mを測る。溝断面は鈍角なV字形をなし、溝底は平坦である。溝S D 8102は、S D 8101より東へ屈曲する溝である。両溝の

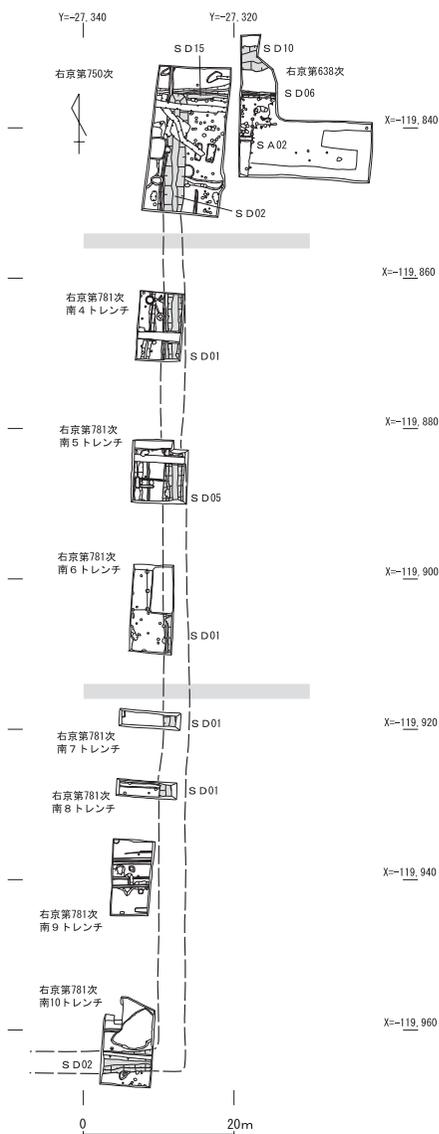
【12世紀末～13世紀初頭】

- ④ 長岡京跡右京第81次(7ANKSN地区)
・開田城ノ内遺跡



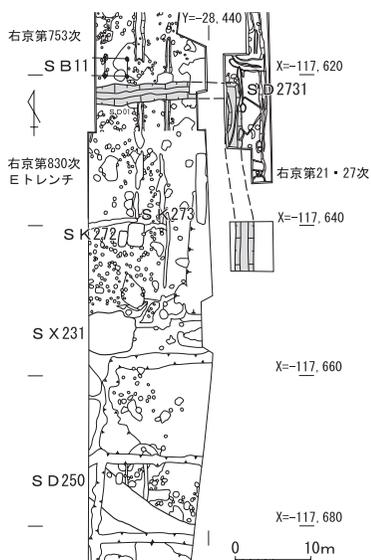
【13世紀代】

- ⑥ 長岡京跡右京第638次・右京第750次(7ANMIK-6地区)・
右京第781次(7ANKSM-11地区)・神足遺跡



【12世紀後半～13世紀中頃】

- ⑤ 長岡京跡右京第753次(7ANGHD-5地区)・井ノ内遺跡
長岡京跡右京第830次(7ANGKT-2・GHD-9地区)・井ノ内遺跡



第2図 関連遺構図(2)

埋土中から瓦器が出土した。両溝は中世村落の環濠か、村落内の地割りの性格の溝と考えられると報告されている。

- ⑤長岡京跡右京第753、830次・井ノ内遺跡^(注7)(第2図⑤)

L字状に屈曲する溝を検出した。幅2.3m、深さ0.7mを測り、西から東に傾斜する。溝

の断面はU字形をなし、埋土中から多量の土師器皿・羽釜・瓦器椀・皿、鍛冶滓・鉄釘・飾り金具などが出土した。時期は、12世紀後半を中心とする13世紀中頃までである。検出した溝は、鍛冶工房域を画するもので、中世居館の外郭施設とする。南限を画する溝の検出には至っておらず、範囲については不明である。溝S D250は溝として調査したが、その床面に轍痕を数条検出できたことから道路状遺構と判断し、鍛冶工房域造成時には埋められた。また、S K272・273付近に柱穴が密集する。その範囲とL字状に屈曲する溝との間には、柱穴が少ない空白のか所が帯状に存在する。土塁が存在したのではないかと考える。当地は、乙訓条里九条七里にあたり、入り組んだ形で存在した長岡荘や富坂荘と大きく関連すると考えられる。

⑥長岡京跡右京第638、750、781次・神足遺跡^(注8)(第2図⑥)

J R長岡京駅西側から、3次の調査地を縦断する形で溝を検出した。第638次調査地からは東西方向の溝を、第750次調査地から南方に真っ直ぐ延びる溝は第781次調査地まで約130m続き、第781次南10トレンチでは西方に屈曲する。それぞれの規模は、第638次の東西方向の溝は幅2.8m・深さ0.4m、第750・781次の南北方向の溝は幅2.5～3.0m・深さ1.0～1.2m、第781次南10トレンチで検出した西方に屈曲する溝は幅3.0m・深さ1.0mを測る。

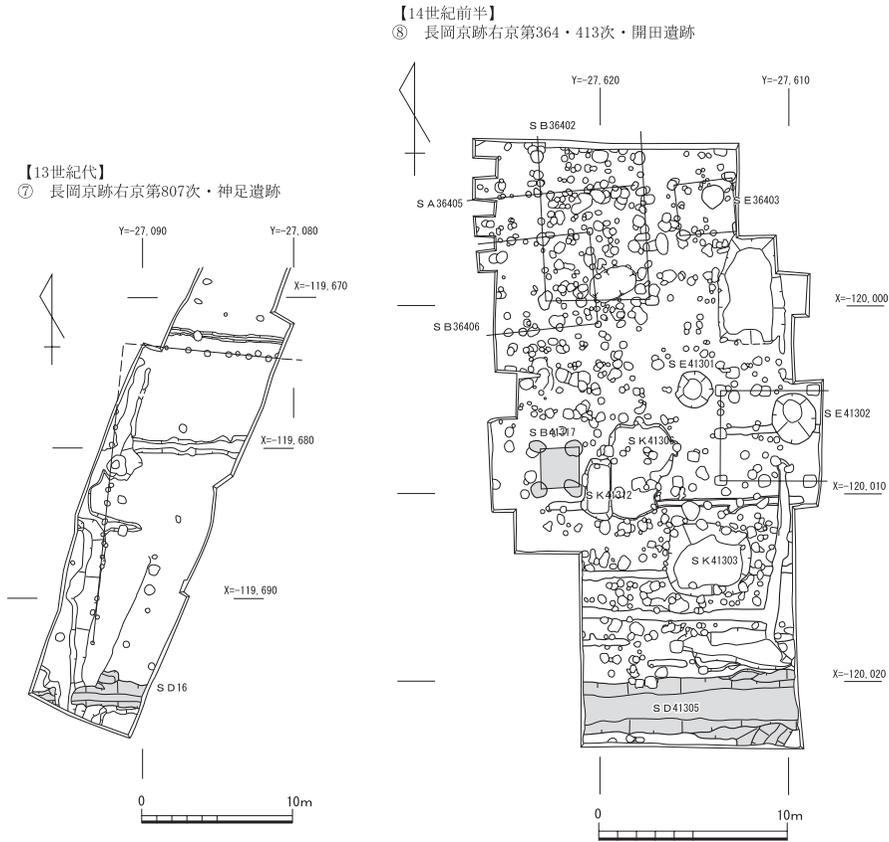
第638次の溝からは、土器類は出土せず、炉壁片が出土した。第750次の溝からは多量の土器とともに炉壁や滓が出土した。第781次南4トレンチの出土遺物に炉壁や滓の出土がみられないことから、南4トレンチ北側で溝や柵列でもって区画され、その北側は鍛冶工房域であったと想定される。また南4トレンチから南6トレンチまでは溝西側斜面に幅30～40cmのテラスが形成されるが、南7トレンチ以南ではテラス部は認められない。これは、南6と7トレンチの間で区画されていた可能性がある。出土遺物は、おおむね13世紀代のものであるが、第750次の溝は堆積状況から再掘削されていたことが判明し、再掘削前の埋土からは13世紀前葉のものが出土している。これは区画構築時期を示すもので、段階を経て南北130mの範囲が整備されたものと考えられる。当地は、乙訓条里の六条九里の坪境にあたる。

⑦長岡京跡右京第807次・神足遺跡^(注9)(第3図⑦)

J R長岡京駅前から1条の溝を検出されている。東西方向の溝で、幅1.8m、深さ0.7mを測る。中世遺構が集中する西国街道から離れた位置であることから居館を囲む施設の可能性があるとする。瓦器椀・皿、土師器鉢などが出土し、13世紀代である。

⑧長岡京跡右京第364、413次・開田遺跡^(注10)(第3図⑧)

J R長岡京駅南西600mの付近から溝・掘立柱建物跡・柵・井戸など、14世紀前半の建物群が確認された。溝S D41305は、幅3m、深さ1mを測る。断面形は逆台形で、溝底



第3図 関連遺構図(3)

は平坦である。土塁の痕跡は確認していない。溝内から土師器皿、瀬戸焼灰釉丸皿・平碗、備前焼すり鉢、信楽焼すり鉢などが出土している。櫓状建物 S B 41317は、四隅に並ぶ大型の円形柱穴4個を検出した。柱穴は、径0.7～1.0m、深さ0.5～0.7mを測る。戦国期の遺構である。溝 S D 41305の内側櫓状建物までの間には戦後期の遺構が希薄であることから、土塁が存在したものと想定する。

3. まとめ

以上、主に乙訓地域において報告されてきた調査資料中から、方形区画(居館)の一角ではないかと思われる遺跡を時期ごとに羅列してみた。掲載した図面については、報告書内に使用された図を再トレースしたものである。

方形区画の初見は、佐山遺跡や下海印寺遺跡の事例に見られるように、11世紀末頃に求めることができると考える。この時点では、大きな堀(濠)で区画され、それに沿う形で堀

が存在し、内部には数棟からなる掘立柱建物跡群が存在する。12世紀後半から13世紀代になると井ノ内遺跡や神足遺跡で見られるように、堀に沿って土塁が築かれ、いくつかの区画が集まって屋敷地を築くようになる。平地に立地する方形区画に土塁が明確に遺存している例はなく、井ノ内遺跡に見られるように、堀の内側に遺構の希薄な地帯が帯状に広がるということで土塁が存在したと考えた。中井均氏は、大阪府美原町（現堺市美原区）の日置荘遺跡においても堀の内側に幅7.5mを測る空白地の存在を指摘し、大阪市の長原遺跡や和気遺跡とともに土塁が存在したとされる。また、土塁そのものが残る遺跡として福知山市の大内城跡を掲げる。上記遺跡は12世紀後半～13世紀中葉である。また、同氏は方形区画の拡大化（複郭への萌芽）^(註11)を13世紀代とする。神足遺跡で発見した堀は、全長130mと長大なものであるが、その形状および埋土中の出土遺物などから、鍛冶工房域の存在や複数の区画で構成された居館の一つと考える。14世紀前半の開田遺跡には、櫓状建物が存在し、防衛的機能の濃い例と考える。

平安時代末に現れた方形居館は、在地領主層の居館として現れ、当初はその威信を示すと同時に灌漑用水としての堀が築かれるなど周辺整備の一環として選地されたが、その後、階層・職種などによる複数の区画が設けられるようになる。徐々に土塁・櫓の出現により、防衛的機能を備えた居館へと変貌していったと考える。

（おかざき・けんいち＝当調査研究センター調査第2課専門調査員）

注1 平成22年度に隣接地の調査を行い、平成23年度に整理報告する予定であるため、詳細を記したのものとしては、現在のところ現地説明会資料ならびに京都府埋蔵文化財情報のみである。
「長岡京跡右京第970次・下海印寺遺跡現地説明会資料」№09-02、09-05（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

岡崎研一「長岡京跡右京第970次（7ANOSJ-5）・下海印寺遺跡の発掘調査」（『京都府埋蔵文化財調査情報』112（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）2010

注2 『佐山遺跡 京都府遺跡調査報告書』第33冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 2003

注3 注1と同じ

注4 吉本昌弘「長岡京域の条里地割りについて」（『長岡京』第14号 長岡京跡発掘調査研究所）1979

長岡京市史編さん委員会『長岡京市史』本文編一 長岡京市役所 平成8年

注5 「速報展 倭人のムラを掘る－大山崎中学校新校地の発掘調査成果から－」大山崎町教育委員会・大山崎町歴史資料館 2008

注6 「長岡京跡右京第81次（7ANKSN地区）調査概要」（『長岡京市文化財調査報告書』第9冊 長

- 岡京市教育委員会)1982
- 注7 「8. 長岡京跡右京第753次(7ANGHD-5地区)・井ノ内遺跡・上里遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第107冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2003
- 「2. 長岡京跡右京第830次(7ANGKT-2・GHD-9地区)・上里遺跡・井ノ内遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第117冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2006
- 注8 「長岡京跡右京第638次・神足遺跡発掘調査報告」(『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第15集 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター)1999
- 「9. 長岡京跡右京第750次(7ANMHK-6地区)・神足遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第107冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2003
- 「3. 長岡京跡右京第781次(7ANKSM-11地区)・神足遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第112冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2004
- 注9 「長岡京跡右京第807次発掘調査報告書」(『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第43集 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター)2005
- 注10 「長岡京跡右京第364次(7ANMSI-10地区)調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第27冊 長岡京市教育委員会)1991
- 「長岡京跡右京第413次(7ANMSI-12地区)調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第31冊 長岡京市教育委員会)1993
- 注11 中井均「中世の居館・寺そして村落」-西国を中心として-(『中世の城と考古学』新人物往來社)1998